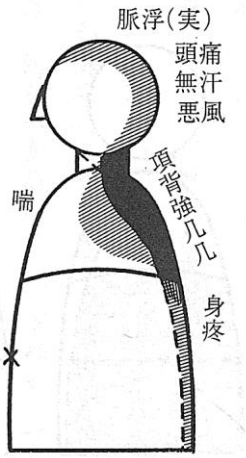
からだとは・病とは(89)　週刊新潮『「漢方」の大嘘』への賛同と反論(2)　鈴木斉観（せいかん）

特集への賛同と反論（1）では、主に賛同を述べたが、ここでは反論が主となる。この特集は現代中医学の立場から書かれ、マニュアル漢方を古方漢方と誤解しているからだ。内容を見ていこう。特集の文章は簡略化して引用する。

現代中医学の考えが出てくる。「治療法は人ごとに違い、その人はどういった性質であるかを“証”といい、証を見て、その人に合ったものを出す」。古方漢方での証は、そのように病む前からその人の体質として備わっているものではなく、病んだ時の病態である。その証に従って薬方を決めていくことを方証相対という。本来の方証相対をマニュアル漢方では誤って捉えられているのだが、その誤った「方証相対」を特集は非難している。それが本来の古方派の方証相対だと思っているのは誤解であり、そこから誤った展開となっている。

「ツムラが方証相対という一部の流派が唱えていることを全国に広めた。」古方派ないし折衷派を指すのだろう。「患者の症状を“証”といい、それとセットになって処方があるというのは稚拙な考えだ」。図は葛根湯を使う証を表しているが、症状としての頭痛・無汗・悪風（寒気）・項背強（首肩凝り）が証なのではない。そうした症状を引き起こしている病態、つまり図に表されたものを指している。



〔葛根湯証〕

ツムラは漢方医を促成するために講習会をやっているようだが、そこでの質疑応答を批判している。「『寒気がして肩がこり、汗が出ないような状態であれば、葛根湯が効くことは分かったが、汗が出ている時や寒気でなく熱を感じている時は？』と質問すると、『大まかに証を捉えて、葛根湯を使えばいい』と答えられたという。『それでは方証相対が破綻している』と言うと、大病院の副院長である講師は口ごもってしまった」と。

「大病院の副院長が講師としているのは、受けが良く、また大病院での漢方薬の使用に繋がるからだ」。「漢方は元々開業医の中で伝承されてきたもので、開業医にしか優れた漢方医はいない」と批判した本人が言う様に、この副院長は優れた漢方医ではなく、マニュアル漢方により促成された漢方医であることは明らかである。優れた漢方医ならば、証に対する誤解を解いただろう。また汗が出ている場合には証が変わり、桂枝加葛根湯が考えられるし、熱を感じる場合には少陽病や陽明病の証であるか検討しなければいけないと説明しただろう。

北里大学東洋医学総合研究所のパンフレットに「中国伝統医学が基礎になりますが、その後、日本独自に発展したものを漢方と言います。」とあるのを、ツムラのＨＰの文面と同趣旨の内容であることで、特集では、北里大東洋医学総合研究所の漢方をツムラのマニュアル漢方と同一視しているが、これもおかしい。北里大東洋医学総合研究所は初代の所長が大塚敬節（古方派）、２代目が矢作道明（折衷派）であることからして、古方派・折衷派の系統であり、江戸時代に日本独自の発展を遂げた古方漢方を創始した吉益東洞に繋がっている。それが「日本独自に発展」という言葉になっている。つまり、特集は現代中医学が、マニュアル漢方を古方漢方と同一視し、古方漢方にまで非難の矛先を向けているわけである。

古方派あるいは折衷派に取材すれば、この特集は全く違ったものになっていたのだろう。

（2017 年 12 月大雪）